

氏名(本籍)	と い ひろ と 土 井 裕 人 (愛知県)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 甲 第 3870 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	後期著作を中心としたプラトンの宗教思想

主 査	筑波大学教授	文学博士	山 中 弘
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	塩 尻 和 子
副 査	筑波大学助教授	博士(文学)	桑 原 直 己
副 査	筑波大学講師	博士(文学)	久 保 徹

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、プラトンの後期著作『ティマイオス』を主に取り上げることを通じて、プラトンの宗教思想の特質を明らかにすることを目的としている。まず、第1章では、プラトンにおける宇宙と人間の相関関係を理解するため、『ティマイオス』における身体や魂の「治癒」を論じる。同篇によれば、人間の病は①身体の病、②魂の病、③魂と身体の不均衡による病という三つに分けられるが、人間は、神的魂である知性が機能不全になった状態で誕生するので、出生時から魂の病に罹っているとされ、こうした病の状態からの治癒は、神たる宇宙を模範として知を求め本来の神的あり方を恢復することでもあり、それが人間の責務とされている。

第2章では、「神に似ること」の基盤をなしている、制作神から与えられた「同」と「異」という二つの回転の動への秩序づけを論じている。結論を先取りすれば、プラトンにおいて、「神に似ること」は、感覚的対象を捉える「異」の回転の動と知性的対象を捉える「同」の回転の動とを本来のあり方に回復させることにより達せられるとされる。しかし、感覚的事物から知性的対象へという知の上昇がどのようになるのか、また、物的なイメージのある運動がそれ自体は物的ではない知となぜ関係するのか、という二つの問題が残される。前者については、『ティマイオス』で度々登場する「似たものは似たものにより把握される」という原理を念頭に置いて、人間の魂の二つの円環のうち「異」の円環を用いて感覚的対象を捉えることから「神に似ること」に繋がる知の営為は始まり、それから不可視の知的対象を捉える「同」の円環を働かせるように知が上昇し、その過程で自らも神に似た宗教的実存に変容していくと考えられる。後者については、『法律』第10巻の神の存在証明のなかで、元型として知性のはたらきがなぞるべき似像には同じ中心のまわりを一様に回転する球体の運動が挙げられ、他方、知性的でないものには中心がなく無秩序な運動が対応するとされていた。そのため、「神に似ること」は、感覚的シンボルとして捉えられる似像をよすがとして不可視の知的活動や知的存在の探究に至るといふ、いわば存在次元を越えていく営みとして考えることができよう。

第3章では、プラトンの「神に似ること」の後世における様相について、キリスト教思想とりわけ神秘主義に大きな影響を与えた偽ディオニュシオス・アレオパギテスの「神化」と「合一」というテーマから発展

的に考察する。偽ディオニュシオスの『天上位階論』では、天上の天使の位階が聖書に記された理由として、人間に理解できる感覚的表現のシンボルで知性的な天の存在者を示すことによって人間の知を上昇させ、人間を相応しい神化に導くためと述べられている。それとともに、位階は自分の能力に従って神を模倣すべく上昇するためのものとされ、「神化」や「合一」が自己を脱して神を模倣する過程によって実現することが示唆されている。

第4章では、多くの人を不安に陥れる死、また死すべき者として現世を生きるはかなき人間の「存在」はいかなる意味を持つのかという問題を考察する。中期著作『パイドン』において、プラトンにおける生と死の問題は、ロゴスの営為によって論じられる生の局面とミュートスの営為によって語られる死の局面という二者が深く結びついたものとして立ち現れる。プラトンにとって愛智（哲学）とは魂を純化して真の知に立ち返ることであり、「哲学は死の練習」と言われるように身体性からの離脱を伴うものであった。しかるに、魂が身体を離れることになる死は恐れるべきものではなく、真実在を捉える好機としてむしろ希望あるものとなる。『ティマイオス』においても、宇宙と人間の起源が語られるなかで人間が生死を繰り返す意味が宇宙という次元から明らかにされる。また、宇宙における人間の責務として、宇宙の知的活動に倣うことにより魂の神的部分である知性を養うことも主張されている。

第5章では、人間が遭遇しともすれば神から離反してしまうことになる苦しみや不条理の問題、すなわち「神義論」の問題について、『ティマイオス』と同じ後期著作に属する『法律』第10巻を主に取り上げて論じる。プラトンにおける宇宙は善なる神であり、人間も知を求め「神に似ること」を目指すものとして制作されたが、現実世界においてさまざまな「悪」や障碍に直面する人間にとって神義論の問題は避けられないからである。『法律』第10巻のプラトンは、神を人間に対して無関心だと咎める不敬虔者に対して、表裏一体を成す二つの説得を提示する。ロゴスによる説得では、善なる神々はいかなる悪徳を持ち得ず、偉大なるゆえに容易に万物を配慮できると論じられる。続いて、ホメロスを引用したミュートスによる説得では、人間の境遇は自身の責任に応じて神から与えられたものであって、それは宇宙という大きな視点において意味を持っていること、さらに「悪人の栄華」も実際にはお互いを傷つけあう極限の不幸であって羨むに足らないことが語られる。しかし、神の配慮と言ってもこれでは苦しむ者にとって無慈悲であるように思えるが、人間はいかに不遇であっても宇宙において意味ある存在であり、正しい知を持って神の方へ向かうこと—つまり『ティマイオス』における「神に似ること」-が求められているのである。また、これによって人間は神々やダイモンからの助力を受け、宇宙において然るべき位置を持つことになる。

第6章では、『法律』第10巻において明らかになった「神々からの助力」という論点を踏まえて再び『ティマイオス』に戻り、「神に似ること」における神々からの配慮や助力について再検討する。そこから明らかになるのは、一見していわゆる「自力救済」の印象がある「神に似ること」も、神の側からのいわば「他力的な配慮や助力なしでは成り立たないということである。第1章で見たように、人間はこの世界に生きものとして出生する際に魂の（とりわけ知性の）はたらきが損なわれ、神的あり方を離れて苦難の道を歩むことになる。そのため、人間が正しい知的活動を回復し「神に似ること」ができるよう、神々は人間の知性を導く模範として天体の可視的運行を秩序だてて行うとともに、それを捉え知の探究に至るための能力を人間に与えている。つまり、神の側からのこうした配慮や助力は、人間の制作の時に際しても人間がこの世界を現実的に生きる際においても、最善を目指して人間に強く関与する制作神や神々から与えられており、神の側に向かう人間の営みそのものを根拠づけているのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、一般に「西洋哲学の源流」とされるプラトン思想を「哲学」と「宗教」の両側面を備えたものと

して捉えなおすことにより、従来必ずしも十分に論じられることのなかったプラトンの宗教思想を明らかにしようとした意欲的な論考である。著者はこの課題を論じるために、イデア論に代表される「哲学思想」と人間による神への接近という「宗教思想」を併せもつプラトンの著作『ティマイオス』とそれに密接に関連を持つ『法律』第10巻を主に取り上げて、それらを「神に似ること」あるいはもう少し一般的に「宇宙・人間・知」という一貫したテーマのもとに考察を試みている。周知のように、本論で詳述されている『ティマイオス』は後期対話篇に位置し、「宇宙の生成からはじめて人間のなりたち」を壮大なスケールで論じた、後世に最も影響力を持ったプラトンの大著であるが、それがもつ宗教思想という側面に注目した研究は非常に少なかったといえる。とりわけ、この著作で論じられていながらも、これまで看過されがちな「神に似ること」を宗教学的観点から論究したことは従来のプラトン研究に一石を投ずるものだといえよう。本論文において、人間がその責務として神たる宇宙を模範として知を求め本来の神的あり方を恢復するという「神に似る」過程そのものが神の側の配慮や助力によって根拠付けられているという著者の指摘は、プラトンの宗教思想とキリスト教の神観念との関係を理解する上できわめて示唆に富んだものといえるだろう。また、著者は『ティマイオス』に即して「神に似ること」を論究するだけでなく、その思想の一つの発展形態として偽ディオニュシオス・アレオバギテスの『天上位階論』を取り上げており、キリスト教神学とネオプラトニズムとの関係を考える上で重要な論点を示すものになっている。さらに、「神義論」問題や「死生観」など、多くの宗教思想に通底する主題をプラトンがどのように考えていたのかを、ソクラテスの刑死を描いた中期の著作『パイドン』なども援用しながら明らかにしており、プラトンの思想理解に不可欠な宗教思想を見事に浮かび上がらせた著者の力量は特筆すべきものがある。

以上のように本論文の成果は高く評価できるものであるが、若干の問題も残されている。本論が取り扱った『ティマイオス』の箇所はかなり限られており、この著作全体との関わりで本論が明らかにした「神に似ること」という思想を位置づけることが必ずしも十分におこなわれているとはいえない。プラトンの宗教思想の全体像は、初期の『ソクラテスの弁明』などを含めた多くのプラトンの著作との係りの中でこそ明らかになるわけであり、その点で本論が後期著作に限定した議論となったことが惜まれる。また、論文全体を貫くテーマの一貫性という問題もある。つまり、本論は「神に似ること」を大きなテーマにしながらも、「神義論」、「死生観」など、いくつかの主題が並列的かつ分散して論じている感があり、「神に似ること」という共通のテーマのもとに各章が緊密で有機的に結びついているという印象が弱かった。

しかし、これらの問題は著者の本論での優れた学問的貢献をなんら減ずるものではない。本論は宗教学的視点から、これまで十分には論じられてこなかったプラトンの宗教思想の解明という問題に果敢に取り組み、その宗教思想に新たな光を投げかけたことは宗教学的視点に立脚したプラトン研究に大きく寄与するものであり、この領域における著者の学問的貢献は特筆すべきものがある。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。